

第3回日本訪問歯科医学会 - 国際学会 -

日 時 : 平成15年11月16日(日) 10:15~16:00

場 所 : 東京ダイヤモンドホテル ダイアホール

プログラム

1. 特別基調講演 『訪問歯科診療におけるメディカルインタビューとは』
東京歯科大学 社会歯科学研究室教授 石井拓男先生
2. 特別講演 『中国における訪問歯科診療の現状』
中国北京大学附属第二臨床医学院人民医院 馮新顔先生
3. 一般講演 『診療室に乗って！アメリカにおける診療車の利用』
American Dental Industries Inc. ジム・キッチ氏
4. 一般講演 日本訪問歯科協会 関西地区 会員発表
『吉村歯科医院の訪問診療の実際』
吉村歯科医院 院長 吉村禎浩先生
5. 一般講演 日本訪問歯科協会 関東地区 会員発表
『咬合が全身に与える影響』
早川ホワイト歯科 院長 早川讓吉先生

訪問歯科診療におけるメディカルインタビュー

東京歯科大学社会歯科学研究室
教授 石井拓男

メディカルインタビューとは医療面接とも称されるもので、ここ数年急速に医学、歯学教育の場で普及してきているものです。医療面接はラポール形成、病歴聴取、患者指導（インフォームド・コンセント、コンプライアンス）の3つの柱からなっております。

歯科の初診ではともすると閉じられた質問から始まることが多いと思われます。「痛いのですか?」「いつからですか?」「では、ちょっと診させてください」といった具合です。患者は早く診てもらいたがっている。診ればわかることをつべこべ聞くことはない、と患者は思っているに違いない。というふうに歯科界では考えられています。確かにそういう思いの患者もいるでしょうが、多くの場合初めて歯科診療室に来る人は苦痛と不安と不満と緊張等のないまぜとなった状態にあるのです。

この患者の緊張を和らげ、不安を解消するのに必要なのが、患者と医療従事者の良好なコミュニケーションなのです。そして良好なコミュニケーションに不可欠なのが、治療的自我です。

J. Watkins が言った「患者の心に入って不安を和らげることが出来るのが治療的自我である」は、M. Balint が提唱した「薬としての医者」と同じ概念とされています。治療的自我は向上できるものであり、生涯にわたってそうすべきものであるのが医療従事者の務めと思われます。医療面接の第1の柱にラポール形成が位置づけられていることの意味は、上記のような背景があるからです。さらに、医療面接は習得可能な態度であり技能であるとされています。

訪問歯科診療では患者とのコミュニケーションが困難であり、患者を取り巻く諸事情が特異的です。今後この面での医療面接の確立が重要と思われます。

略 歴

石井 拓男（昭和 23 年 1 月 21 日生）

最終学歴

昭和 47 年 3 月 愛知学院大学歯学部卒業

主な経歴

昭和 47 年 5 月 愛知学院大学歯学部助手（口腔衛生学教室）

53 年 10 月 愛知学院大学歯学部講師

63 年 11 月 愛知学院大学歯学部助教授

平成 2 年 2 月 厚生省入省

3 年 4 月 厚生省保険局医療課課長補佐

5 年 1 月 厚生省保険局歯科医療管理官

7 年 6 月 厚生省健康政策局歯科衛生課課長

9 年 7 月 厚生省健康政策局歯科保健課課長

11 年 9 月 東京歯科大学社会歯科学研究室教授

主な公職

日本口腔衛生学会理事、日本保健行動科学会理事、
日本歯科医学史学会評議員、日本歯科医学教育学会評議員、
日本公衆衛生学会評議員

中国における訪問歯科診療の現状

中国北京大学附属第二臨床医学院人民医院

助教授 馮 新顔

訪問歯科診療は、社会が高齢化社会への転換に伴って急速に発展してきた新しい歯科診療の分野である。中国においては、近年の社会及び経済の急速な発展に伴い、人口の平均寿命が伸びており、60歳以上の高齢者が総人口の10%以上に達している。今後20～40年で65歳以上の高齢者の割合が総人口の19%までに達すると予測されている。

このような高齢化社会の到来につれて、中国においては訪問歯科治療の需要が高まりつつあるが、訪問歯科診療がいまだに歯科診療の未開発分野のひとつであるのは実状である。

北京市は中国の首都で、各方面における水準が進んでいる。

今回、北京市を代表にして、中国における訪問歯科診療の現状を紹介する。本発表は北京市の規模の異なる4つの歯科医療機構、大学歯学部附属病院、大学医学部附属病院の歯科、総合病院の歯科、歯科の開業医を例にして、歯科医療機構が訪問歯科診療に取り組む状況、訪問歯科診療の内容、診療報酬の状況等を調査し結果を紹介する。

さらに中国における訪問歯科診療の需要の状況、患者さんが訪問歯科治療に対して気になる問題点等を把握するために、上述の歯科医療機構で受診した60歳以上の患者さんを対象にした、アンケート調査結果も紹介する。

また中国における歯科医療事業及び医療保険制度の現状から上述した調査結果を分析し、中国における訪問歯科診療の展開が直面している社会的及び行政的な状況を紹介します。

略 歴

馮 新顔 (昭和44年9月24日生)

最終学歴

1994年7月 中国人民解放軍第四軍医大学口腔医学学部卒業

主な経歴

1994年7月 中国人民解放軍空軍北京医院口腔科助手

1996年8月 中国北京医科大学（現北京大学医学部）
附属第二臨床医学院人民医院口腔科助手

1998年6月 岩手医科大学歯学部小児歯科客員研究員

2003年3月 岩手医科大学大学院歯学研究科修了

2003年4月 現在に至る

診療室に乗って！アメリカにおける診療車の利用

American Dental Industries Inc.
国内セールスマネージャー ジム・キッチ

- 1．アメリカにおける診療車の歴史
- 2．設備の設置法と位置
- 3．内側と外側の様子
- 4．どんな診療法に用いるのか

プロフィール

ジム・キッチ (Jim Kitch)

1995年よりオレゴン州ポートランドの American Dental Industries Inc.における国内セールスマネージャー。国際ビジネスとスモールビジネスを専攻し文学士 (B.A.) のタイトルを持つ。

キッチ氏は祖母が秋田市で 20 年間英語の教師をしていたことから始まり、伯父である Dennis Kitch はアメリカ飼料穀物協会の駐日代表を長期に渡り務めていたことから、日本とは非常に結びつきが深い。

ボランティアの消防士、パラメディック (医療補助員)、救急救命士でもある。

吉村歯科医院の訪問歯科診療の実際

吉村歯科医院
院長 吉村禎浩

高齢化社会を迎え訪問歯科診療は通院できない方にとって重要な役割を果たすこととなります。

しかしながら訪問歯科診療は大学でも習っておらず、考え方や治療システムも自ら模索していかなければならないことが多くあります。

また訪問歯科診療は決して片手間でできる診療ではなく、適確な治療技術と質の高いコミュニケーションが必要です。またスタッフの協力も欠かせません。

その中で、日々訪問歯科診療を行っている当院の考え方や取り組みの実際をお話させていただき、皆様のご意見を仰ぎたいと思います。

略 歴

吉村禎浩（昭和 31 年 1 月 25 日生）

最終学歴

昭和 57 年 3 月 岐阜歯科大学（現 朝日大学）卒業

主な経歴

昭和 59 年 10 月 吉村歯科医院 開業

主な公職

日本訪問歯科協会 理事

咬合が全身に与える影響

早川ホワイト歯科
院長 早川讓吉

スポーツ歯学の観点から、理想的咬合を与えることにより、運動能力がどう引き出されるか、また、長年の咬合不良による生体の変化はどうかについての考察、及び訪問歯科診療における症例について。

略 歴

早川讓吉（昭和 29 年 1 月 7 日）

最終学歴

昭和 56 年 4 月 日本大学松戸歯学部卒業

主な経歴

昭和 57 年 7 月 ホワイト歯科前身早川歯科開業

昭和 58 年 4 月 日本大学歯学部補綴 入局

平成 2 年 4 月 補綴学歯学博士

平成 2 年 5 月 日本大学歯学部補綴科兼任講師

主な公職

荏原歯科医師会理事、日本補綴学会会員、
日本大学松戸歯学部同窓会本部常任理事、
日本大学松戸歯学部同窓会東京支部連合会専務、
日本訪問歯科協会常任理事
日本訪問歯科医学会副学会長